

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

先月のこのコラムでトッド・プレッチャード調教師を取り上げたが、そうなると紹介しないわけにはいかないのがボブ・バファート調教師だ。プレッチャー師が東海岸の雄なら、これに對峙する西海岸の巨魁がボブ・バファート師で、しかもおよそ1か月後に迫ったケンタッキー・ダービーへ向けた有力馬を複数抱えているという点でも、バファート師はプレッチャー師と同じ立場にあるのだ。

1953年1月13日にアリゾナで生まれたバファート師は、現在61歳になる。この原稿を書くにあたって彼の経歴を改めて調べた筆者は、バファートが既に還暦を越えていることに驚かされることになった。クオーターホースの世界からサラブレッドの世界に転じ、西海岸の競馬界にまさに彗星のように現れたのが1991年で、あれから既に四半世紀が経とうとしているのだから、年齢が60を超えるのもむしろ当然かもしれない。しかし、当時から金髪がトレードマークだった風貌は少しも変わつておらず、やんちゃ坊主がそのまま大人になったような雰囲気もそのままだ。

調教師なのに朝が苦手で、管理馬の攻め馬を見ながら大欠伸を連発する様から“Sleepy Bob”（眠たいボブ）”のニックネームをもらったバファート。ギターをかき鳴らすのが趣味で、Bafff Roomと名付けた厩舎の一室にエレキギターを持ち込んで、空き時間に1～2曲披露し

て悦に入るという型破りの男である。

メデイアには常に協力的で、ウイットに富んだコメントを出してくれるから、彼の廻りは常に記者連中が取り巻くようになつた。1996年、管理馬キャヴォニー・アがケンタッキー・ダービーで鼻差2着に惜敗した後のことだ。2冠目のブリーカネスは何としても獲りたいから、キャヴォニアに秘密の特訓を施している。特訓を見たい人は〇月〇日の〇時に厩舎に来い、といつて集めた報道陣を前に、自らキャヴォニアを引いて現れたバファートは、おもむろにキャヴォニアの鼻をさすつて引つ張る仕草を繰り返した。挙句、報道陣に向かつて一鼻差で負けることがないよう、彼の鼻を伸ばしているのだ。

翌1997年にシルヴァーチャームでケンタッキー・ダービー初制覇を果たしたバファートは、その後2002年までの6年間に、アメリカ中の競馬関係者にとって悲願となつてゐるダービーを3回制覇。ダービーの勝ち方を知つてゐる調教師として崇められ、この頃から“ツクネームはDerby Bob”となつた。

今世紀に入つて、バファート厩舎の成績が落ち込んだ時期があつた。カリフォルニア州の主要競馬場のメイントラックがダートからオールウェザーに変わつた時で、オールウェザーを使つた調教など、馬場が変わつたことで強いられた仕様転換に即

座に対応できなかつたのだ。だが、ものの1年ほどで、バファートの管理馬たちは再び走り始めて最前線にカムバック。わずかな期間で立て直しに成功したバファートは、やはり優れた調教師であると、関係者やファンから称賛されることになつた。

2009年に競馬の殿堂入りを果した後も、2010年にはルッキンアットラッキーでブリーカネスSを、2011年にはラシックを制覇するなど、バファートはアメリカにおける競馬シーンの随所で存在感を示している。

そのバファート厩舎にあつて、最後の勝利から既に10年以上が経過してゐるケンタッキー・ダービーへ向けた有力候補となつてゐるのが、昨年の全米2歳王者のアメリカンラフィロー（父パイオニアオヴザナイル）と、G1ロスアラミトスフューチュリティを含めてデビューから無敗の5連勝を記録しているドルトムント（父ビッグブルー）の2頭だ。久しぶりにDerby Bobがチャーチルダービーに帰つてくるのか、全米のファンがその時を待つてい

る。

その、バファート厩舎にあつて、最後の勝利から既に10年以上が経過してゐるケンタッキー・ダービーへ向けた有力候補となつてゐるのが、昨年の全米2歳王者のアメリカンラフィロー（父パイオニアオヴザナイル）と、G1ロスアラミトスフューチュリティを含めてデビューから無敗の5連勝を記録しているドルトムント（父ビッグブルー）の2頭だ。久しぶりにDerby Bobがチャーチルダービーに帰つてくるのか、全米のファンがその時を待つてい